

## 大山寺縁起絵巻

大山は丹沢大山国定公園の東南端にあり前面がひらけた平野になっているので、ひととき高く独立した形をしています。(標高一二五一・七メートル)

山それ自体が神仏習合の霊山として、江戸時代から尊崇され、中心は不動堂と石尊社です。不動堂は大山寺といい開山は僧良弁(六八九―七七三)とされています。明治六年には、神仏分離により阿夫利神社と大山寺に分かれ、今日にいたっています。

この絵巻のあらすじは、金の鷲にさらわれた子供が、やがて成長して

奈良東大寺の別当良弁僧正になり、子供をさらわれた老夫婦(相模国国府)と再会します。やがて良弁は相模国へ戻り大山に登って現在の金堂の前あたりに来たとき、地中から光明がさしていました。人々がここを掘ると金色の石造りの不動明王が座していました。

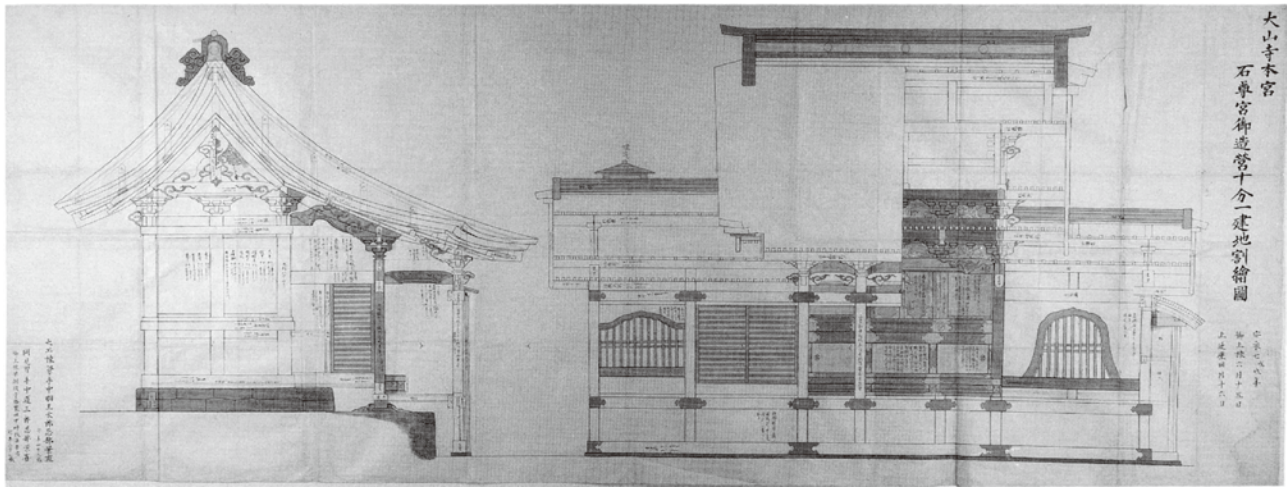
人々はこれを拝みましたが目がくらみひれ伏してしまいました。そこで良弁が祈禱すると人々は正気に戻ったという「物語」としてきわめて面白い展開になっています。

(当館寄託 手中道子氏所蔵資料)



大山寺縁起絵巻の部分

作成年代不明



大山石尊社(写真1)

## 大山・宮大工棟梁

てなかみょうおうたるうもんじよ  
 手中明王太郎文書の世界

# 景直と景元

### 一、はじめに

社寺の建築を専門的に行なっていた人を宮大工といいます。このたび紹介するのは、落語の「大山詣」でも有名な、江戸時代からの庶民の人氣が高かった大山信仰を陰で支えた棟梁の話です。手中明王太郎と称する宮大工にスポットを当てました。

『新編相模国風土記稿』には、この手中明王太郎家は工匠・師職(御師)兼帯の旧家として登場しています。江戸中期以降の大山寺や山頂の石尊社の普請には、代々その中心となつて指揮をし、活躍していった家柄でした。ここでは一際高度な技術と知的的好奇心に満ち溢れた二人の明王太郎をとりあげて、当館に寄託された手中明王太郎家文書の素晴らしさの一端に迫りたいと思います。

### 二、明王太郎景直のこと

宝暦く天明期(一八世紀中頃から後半にかけて)頃に活躍をした明王

太郎景直は、江戸幕府に出仕して江戸城や京都御所の造営に関わったことや、金丸彦五郎影直の変名をつかつて、『分間江戸大絵図』(明和八年刊)を江戸日本橋の須原屋から出版したともいわれています。また、明和八年(一七七二)の大火事によって焼失してしまつた大山山頂の石尊社の再建にあつたのは、幕府の援助を期待できなかつたため、この景直を中心に幾多の試練に挑戦していくことになりました。そして安永七年(一七七八)には、大山信仰の要である石尊社を見事な姿(写真1)で、よみがえらせることに成功したのでした。

### 三、明王太郎景元のこと

幕末維新期の名棟梁・景元は、景直の3代後の明王太郎でした。景元は、平戸村(現、横浜市戸塚区)出身の田中定言という若者でしたが、明王太郎敏景のもとに弟子入りをし、めきめきとその技を磨いて行きました。そんな定吉が師匠である敏景の

娘婿になつたのは、弘化二年(一八四五)のことです。この後しばらくして、彼が明王太郎の名跡を継いで、ここに激動の幕末から明治を駆け抜ける名匠・手中明王太郎景元の誕生を迎えるわけです。

この景元は、安政元年(一八五四)から明治三六年(一九〇三)に至るまでの四九年間に、百冊をこえる『手控』の類を残していました。私たちは、これを総称して『明王太郎日記』(写真2)と呼んでいます。この史料から私たちは、宮大工の周到な下準備や作業の裏話をはじめとして、幕末維新期の大山や相模国の世相を読み取るうえで、恰好の素材の提供を



明王太郎日記(写真2)

受けることができるでしょう。

#### 四、幕末の海防と明王太郎

幕末期の外圧という、時代の流れを感じながら、状況の把握と自分の才能の生かし方を模索する明王太郎景元の姿を次にみてみましょう。国難打開の使命感に支えられた景元の創意工夫には、本当に驚かされるものがあります。

嘉永六年（一八五三）六月三日、ペリーの浦賀来航は、明王太郎景元にとっても、大きな開心事となっていたようです。この時期、多くの村の知識人たちが、黒船来航に興味を持ち、情報の収集にあたっていることは、地方文書の中からも容易に探しだすことはできます。しかし、景元の場合は、もっと積極的な動きをみせるのです。

ペリー来航を重くみた徳川幕府は、これまでの大船建造禁止の解禁に踏み切り、幕府自身急拠「洋式軍艦・鳳凰丸」の建造に取り掛かりました。この「鳳凰丸」が完成した嘉永七年（一八五四）五月には、明王太郎景元は、早々とこの船の内部略図を写し取っています。またどうやら、この軍艦に触発されたらしく、同年の一二月には、海上移動式の大型要塞船の設計をしています。

「新案城製筏縮図」（写真3）に描かれているのは、全長九一m、幅四五mほどの大型要塞船です。4本マストの帆と人力回転式の外輪を動力とし、前後2つの舵によって小回りの効く器用な方向転換を可能とした設計となっています。櫓や見張台・防壁・内堀までを備えていて、火器も大小の砲あわせて五三门を搭載、重要なところは鉄板で装甲されたといえますから、まさに「浮かぶ城」といった感じですね。

戦国期から近世初期にかけて「海上の城」として恐れられ、次々と没収の憂き目にあった西国大名の大型戦艦「大安宅船」が、仮に幕末という時代の中で蘇生して、さらに進化を遂げたとしたら、この明王太郎景元の発想のようなものになっていたかも知れません。

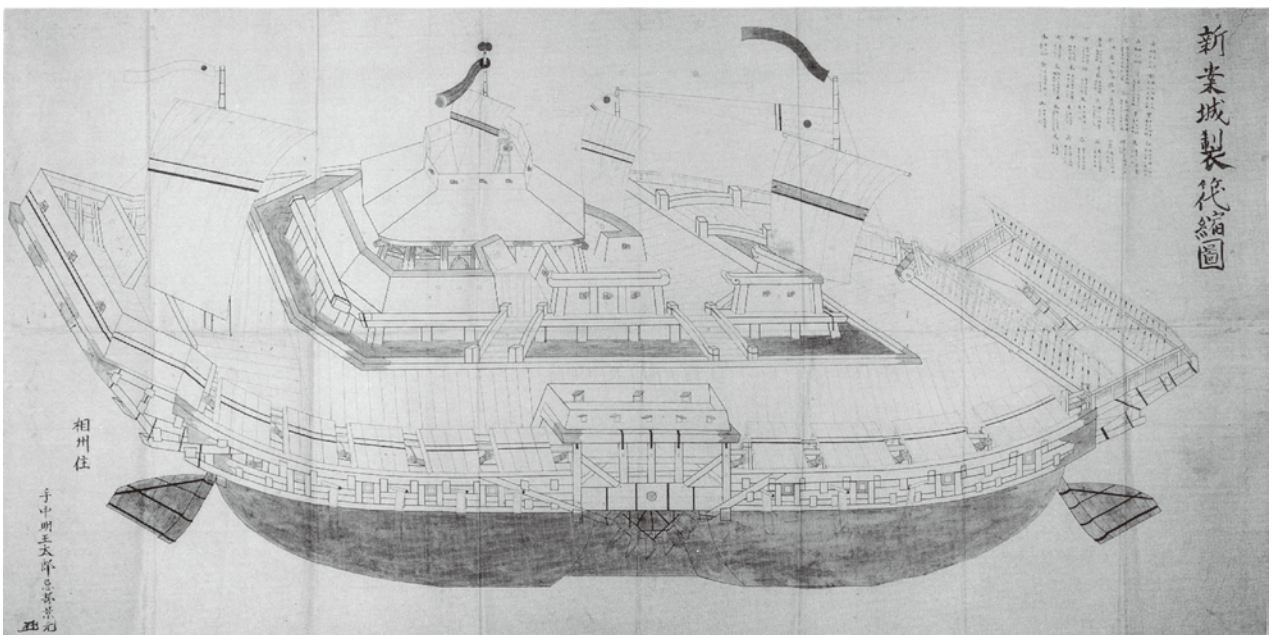
#### 五、おわりにかえて

手中明王太郎文書は、現史料の保護のため、マイクロフィルムによる閲覧を実施しています。また史料の一部は『伊勢原市史 続大山編』にも掲載されています。

当文書の所蔵者で歴史研究者でもある手中正氏は、「安永の石尊宮普請」『伊勢原の歴史』一〇号や『宮大工の伝統と技 神輿と明王太郎』（東

京美術（一九九六年）を著しました。現在は景元の『明王太郎日記』をもとに『幕末維新期の大山（仮題）』の刊行準備をすすめているとのことですので、今後ますます手中明王太郎家文書が、注目を集めていくことは間違いありません。

とりわけ維新期の大山・廃仏毀釈運動に新たな視点を投げ掛ける『明王太郎日記』の公刊（活字化）は、既に多くの研究者から期待が寄せられているところですので、当分文書館としまして、今後、積極的な取り組み、支援をいたしますと考えております。



新案城製筏（写真3）

# 利用者 点描

公文書館は、皆様に支えられて開館5周年を迎えました。



資料を共同でご利用いただけます。



レファレンスコーナーで古文書の解説や資料相談ができます。

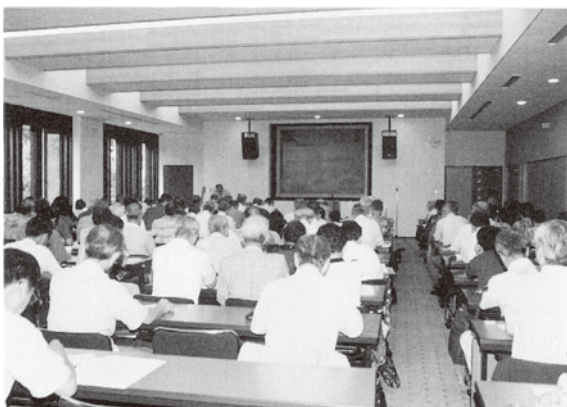


収集した近世文書や近代資料を展示しています。



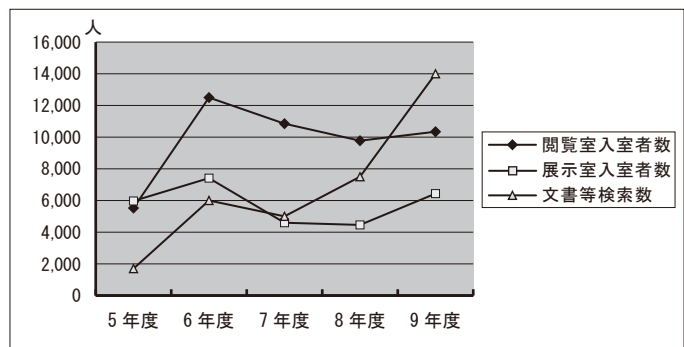
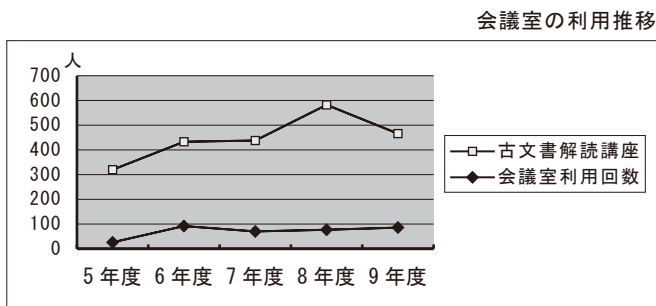
当館には散策路があり、東屋で読書することができます。

来たる十一月一日をもちまして開館5周年を迎えることとなりました。過去の情報を現在へ、過去・現在の情報を未来へと記録資料を後世へ皆様とともに伝え、心豊かなふるさとの創造に向け、その一翼を担ってまいります。

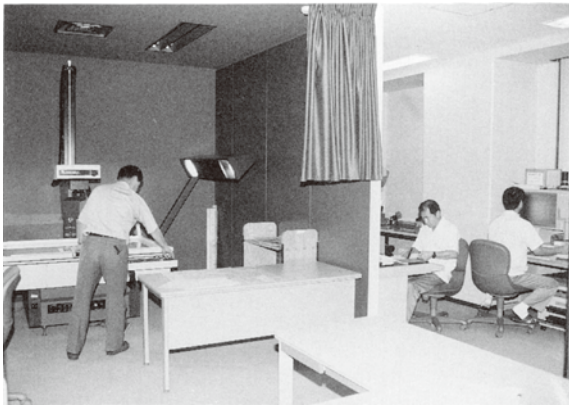


初級から上級まで古文書解説講座を実施しています。

閲覧室等の利用推移



# 資料の収集・保存風景



資料の保存・閲覧のためにマイクロフィルム撮影を行っています。



火災・地震対策や温・湿度の管理がされた書庫で資料が保存されています。



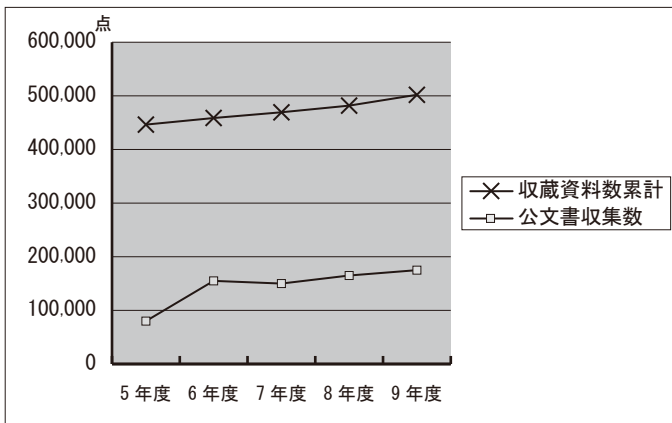
虫損などで痛んだ資料を修復します。



年間約1万箱の県公文書から保存すべき歴史資料を選別します。

収蔵資料、約52万4千点、  
 閲覧室の利用、約4万9千人、  
 展示観覧、約2万9千人と年  
 々収蔵資料や利用の厚みを増  
 しております。  
 これからも皆様の声をお聞  
 きしながら、より良い公文書  
 館としてお役に立てられるよ  
 う努めてまいります。

資料の修蔵推移



各種の目録を作成し、資料の検索等に活用します。

# 収蔵資料紹介

## 1 近代の資料

### 日本博覧図

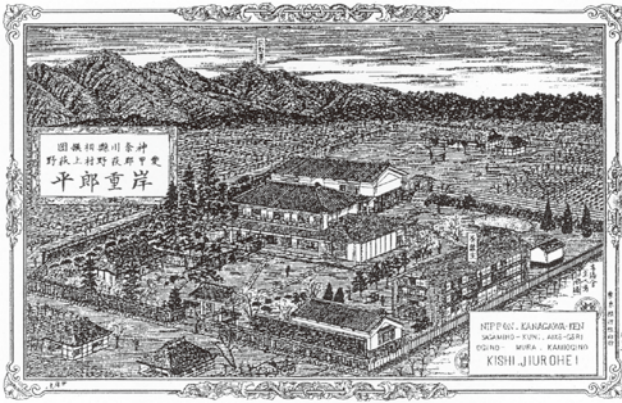
明治二十一年（一八八八）から明治三十年（一九〇七）の十年間に次々と発行された『日本博覧図』は、商店・会社・工場や農家の大邸宅も描かれていて明治特有の商工便覧という面も持っています。また、これを見ると当時の農家や産業の様子がわかるため歴史資料として貴重です。『日本博覧図』は、東京・神奈川を皮切りに、近県をふくめ総数では十冊をこえるであろうと思われま

す。編集については、最初の頃は石原徳太郎が著者兼印刷兼発行人であり、日本博覧絵出版所、精工組、精行舎が予約を集めていましたが、その後編集者は青山豊太郎、発行者は精行舎で最後まで続いています。

発行に際しては、予約募集を行い、注文を得た人を掲載するというやり方をとっていたようでした。

ここに紹介する『日本博覧図』第十編は、このたび新たに岸家（愛甲郡上荻野村）より図書を中心にした資料を寄託されたもので、第十編はこれまで県内所在が確認されていないので新発見ともいえます。すでに当館には岸家より古文書を中心に

一、五四九点ほど寄託されています。博覧図の目録によると東京府三十二件、神奈川県八十件、埼玉県二十件、栃木県二十三件、群馬県二十三件、静岡県二十八件、計二百四件となっています。神奈川県内の主な掲載図については、横浜本町の三井銀行支店、久良岐郡六浦の医師田中耕造、鎌倉郡江島の一等旅館恵比須樓、横須賀旭町の呉服店鈴木忠平兵衛、浦賀町大津の海水浴場大津館、高座郡海老名村の山田嘉穀邸宅、愛甲郡荻野村荻野神社及小学校、同郡愛川村半原の甘利友吉製糸場、大住郡須馬村の砂糖・石油商の杉山泰助、同郡大野村の醤油・味噌醸造の山口英太郎宅などがあります。



「日本博覧図」に描かれた岸家

## 2 近世・近代の資料

### 溝口幸子氏寄贈資料

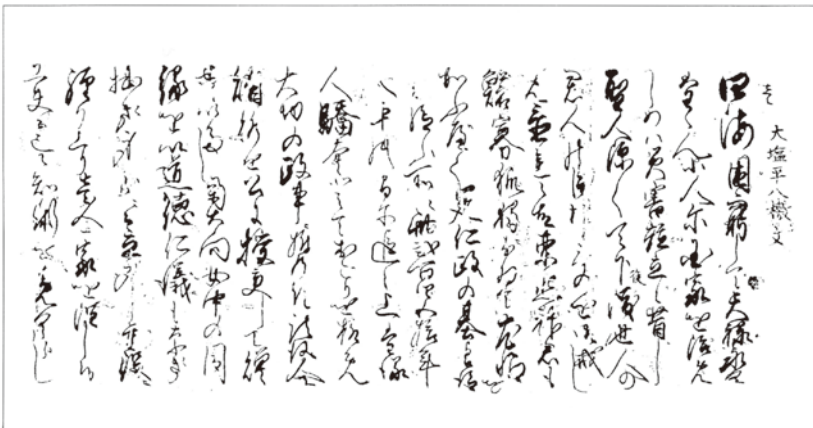
所蔵資料を当公文書館に御寄贈下された溝口幸子さんは、現在東京都練馬区内にお住まいですが、明治三十八年五月頃まで、溝口家は相模湖町千木良七六四番地に居住されていました。溝口家は、室町時代に助義が尾張国溝口に住んだことから苗字が起こり、子孫は古河公方足利成氏・政氏・高基に仕えた武士でした。その後、行直が甲州に至って武田信虎に仕え、子の吉直も武田信玄・勝頼に仕えましたが、武田氏滅亡後は相州津久井縣に転任し、明治末年の東京移住まで旧千木良村を生活の場とされていました。

当家資料に室町時代の資料は無く、系図によって祖先の活躍を推測するだけですが、江戸時代は、溝口家中興の祖で石高百五十石を有した清左衛門満信（明和七年〜天保十四年）の代、寛政十年から古文書があります。明治期に入ると清左衛門澄信が前任の榎本十右衛門から千木良村の戸長を引き継ぎ、明治七年の末から同十年にかけて里長（村用掛）、千木良村小学校世話係を務めた関係から公務上の記録「公用留」が伝わっています。

また、漢学者として著名な恒信は、桂巖（文政五年〜明治三十年）と号

し、生前は多くの漢詩を作り世に残しましたが、彼の著作の一端「墨水三十景詩」「桂巖詩抄（安政元年〜同二年）」「麗和集」等この度寄贈を受けた資料の中にあります。（桂巖については、『津久井郡勢誌』人物篇に詳しい。）

その他、溝口家が東京へ出てからの書簡、中国上海からの書簡、家政関係書、書、拓本、扁額等々七五三点、昭和二十一年に至る資料です。



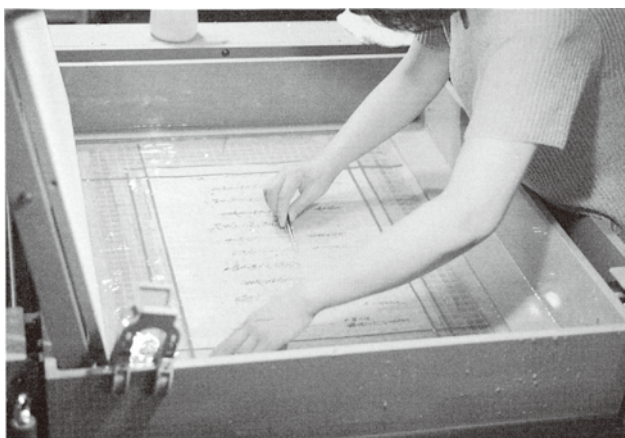
大塩平八郎撤文

## 『史料の修復』

### ——リーフキヤステイング——

古文書を整理し、保存していくうえで、大切な作業となるのが資料の修復というものです。

和紙は酸性質である西洋紙とちがって、その保存性にはすぐれていますが、保存環境を整えておかないと良好な状態をいつまでも維持することはできないのです。高温多湿の日本の気候は、古文書にとって要注意で、湿気を帯びた紙は固い板のようになって、剥がすことも難しい状態にあることもしばしばです。さらに永年の塵・ほこり・鼠をはじめとした小動物やゴキブリなどの排泄物にまみれていることもあって、虫が湧いたりもしています。墨には動物たんぱく質の二カワが混ぜられていますが、これを食べにくる虫によって、皆さんが語る古文書イメージの上位、「虫喰い」が起きるのです。当公文書館では、この板状になった史料を剥離し、「虫喰い」や「破損」の修復を適宜実施しています。慎重かつ繊細な技術が要求されるものな



ので、この作業にずっと携わってきた二名の職員を中心として、これに取り組んできました。

当館では、「虫損・破損」史料の裏面に和紙を張りつける従来の「裏うち」という方法のほかに、「リーフキヤステイング（すきばめ機）」による修復作業も行なっています。

この「リーフキヤステイング」は、紙漉きの原理を応用したものです。

①修復の対象となる史料と同質和紙繊維の水溶液をつくり、②「リーフキヤステイング・マシン」にセットした破損史料の上に流し込みます。③水溶液に浮かんだゴミ等を取り除いたのち、④紙漉きの要領で虫損・破損部分にだけ、水に溶かれた水溶液を付着させます。⑤湿気を除き、繊維を定着させるためにプレス機にかけて、このあと一昼夜の自然乾燥を経て修復作業は終了となります。

「リーフキヤステイング」による史料修復の特徴は、破損箇所だけに和紙繊維が付着しますから、「裏うち」のように史料の厚みが増したり、裏面に書かれた文字が読めなくなったりすることはありません。また、修復に糊は使用されませんから、付着させた和紙繊維を今一度剥離して、原状復帰させることも難しいことではないようです。

「リーフキヤステイング」は、日本ではまだあまり行なわれていない修復方法なので、全国の関係機関からの注目を集めています。当館ではこの方法の利点や問題点をさらに探りながら、今後のよりよい修復技術の確立に努めていきたいと思っています。

## ある日の

### レファレンスから

**Q**

横浜ベイスターズが快進撃を続けていて、今年こそは優勝出来るのではないかと思っています。そこで三十年前か前の優勝の頃の状況を知りたいのですが。

**A**

当館には神奈川新聞（横浜貿易新報）のマイクロフィルムがあるので調べてみました。

大洋ホエールズが優勝した年は昭和三五年でした。優勝決定の日の試合は何と負け試合でした。二位の巨人が敗れた時点で優勝が決定したのです。そして続く日本シリーズでは、大毎オリオンズと対戦して四連勝で日本一となっております。

たまたま優勝祝賀の広告をみて気づいたのは、夏の高校野球で法政二高が優勝していることです。当時「二度あることは三度ある」などという発言があったそうです。今年の神奈川県も横浜高校の春夏連続優勝と似たような状況となっております。期待が持てそうです。

新聞のマイクロフィルムは閲覧できるようになっており、コピーも出来ます（有料）。是非ご利用下さい。

## 開館5周年記念展示のご案内

# 徳川慶喜と同時代人の墨跡

幕末から維新にかけて活躍した人々の  
書簡から人物と歴史を読み取る

徳川慶喜、井伊直弼、佐久間象山、岩倉具視、大久保利通、西郷吉之助、坂本龍馬、吉田松陰、藤田東湖、江藤新平などの、激動期に交わされた書簡20点を展示します。

### 【会期】

平成10年10月27日(火)  
～平成10年11月15日(日)

### 【会場】

県立公文書館特別展示室  
(入場無料)



徳川慶喜 茨城県立歴史館所蔵

インターネットもご利用ください。

公文書館では昨年インターネットホームページを開設しました。展示、講座の案内をはじめ、各種広報等の情報を随時提供しておりますのでご利用ください。

アドレスは

<http://www.pref.kanagawa.jp/kensei/kobunsho> です。

## 利用案内

### ◎開館時間

閲覧室：午前九時から午後五時まで  
会議室：午前九時から午後九時まで

### ◎休館日

月曜日  
国民の祝日(月曜日の場合は翌日も休館)

年末年始(十二月二十八日から一月四日まで)

\*四月一日から四月十五日までは、館内整理のため、閲覧室のご利用はできません。

### ◎利用の仕方

閲覧室の資料は自由に閲覧できます。資料の館外貸し出しは行いません。資料の複写を希望される方は、複写サービスを利用できます。(実費)

### ◎会議室の利用

会議室は一般の方が利用することができます。(有料)

### ◎催し物

年三回程度の企画展示  
入門から上級までの古文書講座及び館外の施設での一日講座

## 交通の案内



- ◆電車の場合 相鉄線「二俣川駅」(横浜駅から急行で11分)下車。徒歩17分又は相鉄バス「運転試験場循環」行きで「運転試験場」下車徒歩3分
- ◆車の場合 「保土ヶ谷バイパス」本村インターから6分

神奈川県立公文書館だより

—第5号—

平成10年10月15日 発行

編集発行

神奈川県立公文書館

横浜市旭区中尾一丁目六番一号

〒241-0815

☎045(364)4456

印刷所 内村印刷株式会社

横浜市中区末吉町一丁目十二番地

〒130-0055

☎045(261)7961